



懸賞短篇小説

不慮の幸福(4)

西山悟

島崎は汽車の中、偶然知り合つた義父の友人・新見康一といふ青年親しくなつて、伯國に在る同胞の現状を聞き日本の事物を語つての経つものも、これで立上つた時、「どうもう来たんですか」と驚いた顔であつた。

新見は、インガ園に下りるさ

時、一人パールに誘つて朝食を注文した。

「アラジルの米は美味しいで

す。でも十二三時間労働して食ふさ

實に美味しいんです」

云々い乍ら盛に食つた、島崎も

してゐないので美味しいもの口に

終るこ新見は表へ出て暫くする

と自動車に乗つて歸つて來た

「島崎さん行きませう」

「いや、こりは〜〜」

島崎は新見を並んで腰下した

「僕一人なら、六糸の道なテク

くまだければならないんです

が客があつて大助かりだアハ

「このインガの町は一九三〇年

から四年前にこの町の森を同

じ森林だったんですよ、四年目の

今日はどうですか小さい住ちも立

派の町です、激しい暴風雨ではあ

りませんがインガのみに限らず之

がら奥の町は全部森林だったま

で夢のやうです

自転車は亦堅か上げて樂くい

るが樂しましめたが、さうさう

新見は附近の事情をまるで我事

の様に説明した。

自転車は、轍を抜け咖啡園を横

の様に走るが、車を抜けて来た

對年に計算するエターナルに

も粘土買では五十五年である

種であるから次に其の説明をする

種であるから次に其の説明をする